

令和5年度個別学力試験問題

小論文

(教育学部初等中等教育コース)

解答時間 60分

配点 100点

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 受験番号を解答用紙の所定の欄に記入してください。
3. 解答は解答用紙の指定された場所に横書きで記入してください。
4. 試験時間中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁及び汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 問題冊子及び下書用紙は持ち帰ってください。

問題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「わかる」ことが「楽しい授業」につながると第2章で指摘したが、わかるようになるには、基礎的な知識や関連する知識を仕込んでおくことが必要となる。

私が大学生の頃は、基礎的な勉強ばかりでつまらない、早く専門の勉強をしたいという学生の声をよく耳にしたし、私自身もそう思うことがあった。だが、今では、「授業を楽しく」といった掛け声のもと、基礎の段階から楽しませることに主眼を置いた教育が行われているように思われる。それによって基礎的な知識の習得が疎かになるのでは、何のための教育なのかわからない。

(中略)

このところの「楽しい授業」を目指す動きにおいては、「楽をして学ぶ」という方向に傾きすぎているように感じる。

本書の冒頭でも、小学校で英語の授業が楽しいという声が多いが、それをもって英語遊びの授業を肯定するのは間違っていると指摘した。それは勉強でなく、いわば幼稚園で行う遊戯をただ英語でやっているに過ぎない。それは学校でやる勉強ではない。

それと似たような楽しさを小学校だけでなく、中学、高校、さらには大学でも行っているとしたら、基礎知識を獲得するための苦勞を知らないままに大きくなってしまふ子が出てくる。

学ぶ喜びを味わえる心を持つチャンス子どもたちに与えるには、「楽をして学ぶ」という方向でなく、「学ぶことが楽しい」という方向を目指すべきだろう。そのためには、基礎的な知識の習得が欠かせない。それによって、はじめて「わかる」を「楽しい」につなげていくことができるのだ。

そもそも学力の向上につなげない限り、授業とは言えないだろう。

勉強でも、スポーツでも、芸術でも、仕事でも、何でもそうだが、ある程度できるようになって「楽しい」と感じられるようになるには、単調な訓練や辛い練習を繰り返すことで基本を習得し、基礎的な能力を身につける必要がある。

そのために大切になるのが非認知能力である。

2000年にノーベル賞を受賞した経済学者ジェームズ・ヘックマンは、人生のどの時点において、教育に金をかけるのが効果的であるかを探る研究を行っている。そして、小学校に入る前の教育がその後の人生を大きく左右することを実証してみせた。しかも、就学前教育でとくに重要なのは、IQのような認知能力、いわゆる知的な能力を高めることよりも、忍耐力や感情コントロール力、共感性、やる気などの非認知能力を高めることだということを見出した。

非認知能力というのは、自分を動機づける(自分をやる気にさせる)力、長期的な視野で行動する力、自分を信じる力、他者を信頼する力、自分の感情をコントロールする力など、知的能力とは異なる能力を指す。

その核となる要素が自己コントロール力である。最新の心理学研究でも、自己コントロール力が人生の成功を大きく左右することが強調されている。

アメリカの心理学者モフィットは、1000人の子どもの対象に、生まれたときから32年間にわたって追跡調査を行った結果、子ども時代の自己コントロール力が将来の健康や富や犯罪を予測することを発見した。

つまり、我慢する力、衝動をコントロールする力、必要に応じて感情表現を抑制する力など、自己コントロール力が高いほど、大人になってから健康度が高く、収入も高く、犯罪を犯すことが少ないことがわかったのである。

このような自己コントロール力は、まさに日本の子育てや教育において伝統的に重視されてきたものである。

(中略)

当然のことだが、勉強ができるようになり、「楽しい」と思えるようになるにも、地道に努力を続けられる忍耐力、怠け心や遊びの誘惑に負けない克己心、やらなければならないことに向けて、自分を動機づける力といった非認知能力が必要となる。

教育現場でも、教育政策の策定においても、こうしたことをしっかり考慮していただきたい。

(出典：榎本博明、『教育現場は困ってる 薄っぺらな大人をつくる実学志向』、平凡社新書、2020年より抜粋・一部改変)

問1 文章全体を200字以内(句読点を含む)で要約しなさい。

問2 下線部の著者の主張に対して、あなたの考えを400字以内(句読点を含む)で述べなさい。